

平成 26 年度 基礎科目 II 解答

注意

- (i) 解答作成には万全を期していますが、論理の飛躍、穴があることは有り得ます。
- (ii) 当 PDF はこの著者に著作権があります。
- (iii) 無断複製、無断転載は一切禁止します。これらの行為が認められた場合は、止むを得ず法的手段に出ることがあります。

平成 26 年度 基礎科目 II 第 1 問

実数値関数 $f(x)$ は $[0, \infty)$ で連続で、 $\lim_{x \rightarrow \infty} f(x) = 1$ とする。このとき

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n!} \int_0^{\infty} f(x) e^{-x} x^n dx = 1$$

であることを証明せよ。

[解答]

繰り返し部分積分を行うことにより、

$$\begin{aligned} \frac{1}{n!} \int e^{-x} x^n dx &= -\frac{e^{-x} x^n}{n!} + \frac{1}{(n-1)!} \int e^{-x} x^{n-1} dx = -\frac{e^{-x} x^n}{n!} - \frac{e^{-x} x^{n-1}}{(n-1)!} + \frac{1}{(n-2)!} \int e^{-x} x^{n-2} dx \\ &= \dots = -\frac{e^{-x} x^n}{n!} - \frac{e^{-x} x^{n-1}}{(n-1)!} - \dots - \frac{e^{-x} x}{1!} + \frac{1}{0!} \int e^{-x} dx \\ &= -\frac{e^{-x} x^n}{n!} - \frac{e^{-x} x^{n-1}}{(n-1)!} - \dots - \frac{e^{-x} x}{1!} - \frac{e^{-x}}{0!} = -e^{-x} \sum_{k=0}^n \frac{x^k}{k!} \end{aligned}$$

が分かる。ただし、 $0^0 = 1$ とする。

ここで、任意に $\epsilon > 0$ をとる。 $\lim_{x \rightarrow \infty} f(x) = 1$ より、

$$\exists R > 0 \text{ s.t. } [x > R \implies |f(x) - 1| < \epsilon]$$

が成り立つから、

$$\begin{aligned} \frac{1}{n!} \int_R^{\infty} f(x) e^{-x} x^n dx &< (1 + \epsilon) \left[-e^{-x} \sum_{k=0}^n \frac{x^k}{k!} \right]_R^{\infty} = (1 + \epsilon) e^{-R} \sum_{k=0}^n \frac{R^k}{k!} \xrightarrow{n \rightarrow \infty} (1 + \epsilon) e^{-R} e^R = 1 + \epsilon, \\ \frac{1}{n!} \int_R^{\infty} f(x) e^{-x} x^n dx &> (1 - \epsilon) \left[-e^{-x} \sum_{k=0}^n \frac{x^k}{k!} \right]_R^{\infty} = (1 - \epsilon) e^{-R} \sum_{k=0}^n \frac{R^k}{k!} \xrightarrow{n \rightarrow \infty} (1 - \epsilon) e^{-R} e^R = 1 - \epsilon \end{aligned}$$

なので、 ϵ の任意性より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n!} \int_R^{\infty} f(x) e^{-x} x^n dx = 1$$

が従う。

また、 f はコンパクト集合 $[0, R]$ で連続だから、 $M := \max_{x \in [0, R]} |f(x)|$ が存在するので、

$$\left| \frac{1}{n!} \int_0^R f(x) e^{-x} x^n dx \right| \leq \frac{M}{n!} \int_0^R e^{-x} x^n dx = M \left(-e^{-R} \sum_{k=0}^n \frac{R^k}{k!} + 1 \right) \xrightarrow{n \rightarrow \infty} M (-e^{-R} e^R + 1) = 0$$

だから、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n!} \int_0^R f(x) e^{-x} x^n dx = 0$$

が従う。

以上より、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n!} \int_0^{\infty} f(x) e^{-x} x^n dx = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{1}{n!} \int_0^R f(x) e^{-x} x^n dx + \frac{1}{n!} \int_R^{\infty} f(x) e^{-x} x^n dx \right) = 1$$

が従う。■

n, m を正の整数とする. x を変数とする n 次以下の \mathbb{C} 係数多項式の全体を V_n とし, 和, 差, スカラー倍により V_n を \mathbb{C} 上のベクトル空間とみなす. m 個の複素数 $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ に対し, 線形写像 $F: V_n \rightarrow \mathbb{C}^m$ を $F(f) = (f(\alpha_1), \dots, f(\alpha_m))$ で定める. このとき,

- (i) F が単射になるための必要十分条件を $n, m, \alpha_1, \dots, \alpha_m$ のみを用いて述べよ.
- (ii) F が全射になるための必要十分条件を $n, m, \alpha_1, \dots, \alpha_m$ のみを用いて述べよ.

[解答]

(i) $r := \#\{\alpha_1, \dots, \alpha_m\}$ とし, $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ の等しいものを全てまとめて β_1, \dots, β_r とする.

F は線形だから, F が単射であることと, $\text{Ker}F = \{0\}$ であることが同値であることに注意する.

もし $n \geq r$ なら, $f(x) = (x - \beta_1) \dots (x - \beta_r) \in V_n \setminus \{0\}$ は $F(f) = 0$ をみたすから $\text{Ker}F \neq \{0\}$ でない. よって, F が単射なら $n < r$ であることが必要. 逆に $n < r$ とすると, 代数学の基本定理より, $f(x) \in V_n \setminus \{0\}$ なら β_1, \dots, β_r のいずれかか根にもたないで, $F(f) \neq (0, \dots, 0)$ である. よって, $\text{Ker}F = \{0\}$ となり, F は単射.

以上より,

$$F \text{ は単射} \iff n < \#\{\alpha_1, \dots, \alpha_m\}$$

である. ■

(ii) F が全射であることと, 任意の $(\gamma_1, \dots, \gamma_m) \in \mathbb{C}^m$ に対して連立方程式

$$(1) \quad \begin{cases} a_n \alpha_1^n + a_{n-1} \alpha_1^{n-1} + \dots + a_1 \alpha_1 + a_0 = \gamma_1 \\ a_n \alpha_2^n + a_{n-1} \alpha_2^{n-1} + \dots + a_1 \alpha_2 + a_0 = \gamma_2 \\ \vdots \\ a_n \alpha_m^n + a_{n-1} \alpha_m^{n-1} + \dots + a_1 \alpha_m + a_0 = \gamma_m \end{cases}$$

の解 $(a_n, a_{n-1}, \dots, a_0) \in \mathbb{C}^m$ が存在することは同値である. さらにこのことは, 任意の $(\gamma_1, \dots, \gamma_m) \in \mathbb{C}^m$ に対して

$$(2) \quad \text{rank} \begin{bmatrix} \alpha_1^n & \alpha_1^{n-1} & \dots & \alpha_1 & 1 \\ \alpha_2^n & \alpha_2^{n-1} & \dots & \alpha_2 & 1 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots \\ \alpha_m^n & \alpha_m^{n-1} & \dots & \alpha_m & 1 \end{bmatrix} = \text{rank} \begin{bmatrix} \alpha_1^n & \alpha_1^{n-1} & \dots & \alpha_1 & 1 & \gamma_1 \\ \alpha_2^n & \alpha_2^{n-1} & \dots & \alpha_2 & 1 & \gamma_2 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \vdots \\ \alpha_m^n & \alpha_m^{n-1} & \dots & \alpha_m & 1 & \gamma_m \end{bmatrix}$$

が成り立つことと同値である.

もし $m > \#\{\alpha_1, \dots, \alpha_m\}$ なら, $\alpha_i = \alpha_j, i < j$ なる $i, j \in \{1, \dots, m\}$ が存在するから, 任意の $f \in V_n$ に対し, $F(f) = (\dots, f(\alpha_i), \dots, f(\alpha_j), \dots)$ は第 i 成分と第 j 成分が等しいから全射になりえない. よって, F が全射なら $m = \#\{\alpha_1, \dots, \alpha_m\}$ であることが必要.

もし $n < m - 1$ なら, $\gamma_1 = \dots = \gamma_m = 1$ のとき, ((2) の左辺) $\geq n + 1 < m =$ ((2) の右辺) だから全射になりえない. よって, F が全射なら $n \geq m - 1$ であることが必要.

逆に $m = \#\{\alpha_1, \dots, \alpha_m\}$ かつ $n \geq m - 1$ とすると, 任意の $(\gamma_1, \dots, \gamma_m) \in \mathbb{C}^m$ に対し,

$$g(x) = \frac{\gamma_1(x - \alpha_2)(x - \alpha_3) \dots (x - \alpha_m)}{(\alpha_1 - \alpha_2)(\alpha_1 - \alpha_3) \dots (\alpha_1 - \alpha_m)} + \frac{\gamma_2(x - \alpha_1)(x - \alpha_3) \dots (x - \alpha_m)}{(\alpha_2 - \alpha_1)(\alpha_2 - \alpha_3) \dots (\alpha_2 - \alpha_m)} \\ + \frac{\gamma_3(x - \alpha_1)(x - \alpha_2) \dots (x - \alpha_m)}{(\alpha_3 - \alpha_1)(\alpha_3 - \alpha_2) \dots (\alpha_3 - \alpha_m)} + \dots + \frac{\gamma_m(x - \alpha_1)(x - \alpha_2) \dots (x - \alpha_{m-1})}{(\alpha_m - \alpha_1)(\alpha_m - \alpha_3) \dots (\alpha_m - \alpha_{m-1})}$$

は V_n の元で $F(g) = (\gamma_1, \dots, \gamma_m)$ をみたす. よって, F は全射である.

以上より,

$$F \text{ は全射} \iff m = \#\{\alpha_1, \dots, \alpha_m\} \wedge n \geq m - 1$$

である. ■

L_R ($R > 0$) は複素平面において $-R + 2i$ を始点, $R + 2i$ を終点とする線分を表す. このとき

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_{L_R} \frac{\cos z}{z^2 + 1} dz$$

の値を求めよ.

[解答]

$L_R = \{z \in \mathbb{C} \mid z = x + 2i, x \in [-R, R]\}$ である. $R > 2$ で考えれば十分.

$$C_R := \{z \in \mathbb{C} \mid z = R + (2 - y)i, y \in [0, 2]\}, L := \{z \in \mathbb{C} \mid z = -x, x \in [-R, R]\},$$

$$C_{-R} := \{z \in \mathbb{C} \mid z = -R + yi, y \in [0, 2]\}, C := \{z \in \mathbb{C} \mid z = Re^{i\theta}, \theta \in [0, \pi]\},$$

$$\Gamma := L_R \cup C_R \cup L \cup C_{-R}, \Delta := C \cup L, f(z) := \frac{e^{iz}}{z^2 + 1}$$

と定める. Γ, Δ をそれぞれ図 1, 図 2 に示した:

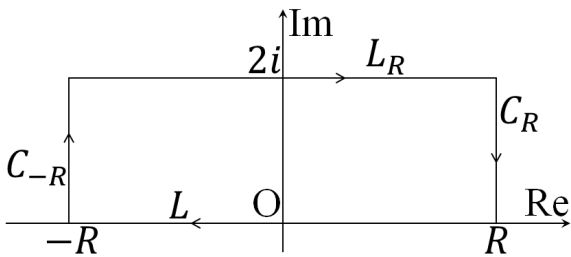


図 1

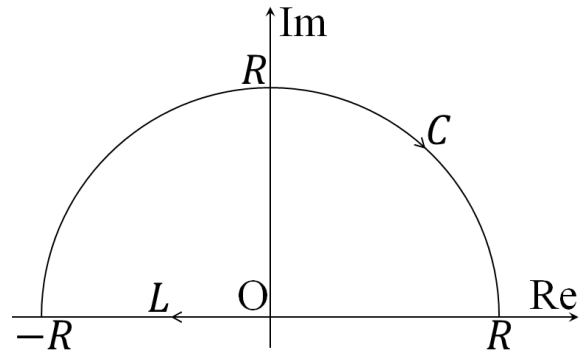


図 2

f は Γ, Δ 上で連続だから,

$$\begin{aligned} \int_{L_R} f(z) dz &= \int_{L_R} \frac{\cos z}{z^2 + 1} dz + i \int_{L_R} \frac{\sin z}{z^2 + 1} dz, \\ \int_{C_{-R}} f(z) dz + \int_{C_R} f(z) dz &= \int_0^2 \frac{e^{i(R+yi)}}{(R+yi)^2 + 1} idy + \int_0^2 \frac{e^{i(R+(2-y)i)}}{(R+(2-y)i)^2 + 1} (-idy) \\ &= \int_0^2 \frac{e^{i(R+yi)}}{(R+yi)^2 + 1} idy + \int_2^0 \frac{e^{i(R+yi)}}{(R+yi)^2 + 1} idy = 0 \quad (\text{第 2 項で } y \text{ を } 2-y \text{ に変数変換}), \\ \left| \int_C f(z) dz \right| &= \left| \int_0^\pi \frac{e^{iRe^{i\theta}}}{R^2 e^{2i\theta} + 1} (iRe^{i\theta} dz) \right| \leq \int_0^\pi \frac{Re^{-R \sin \theta}}{|R^2 e^{2i\theta} + 1|} dz \leq \int_0^\pi \frac{R}{R^2 - 1} dz \\ &= \frac{\pi R}{R^2 - 1} \rightarrow 0 \quad (R \rightarrow \infty) \quad \left(\because \lim_{R \rightarrow \infty} \int_C f(z) dz = 0 \right) \end{aligned}$$

である. f は Γ, Δ 上および $z = i$ を除く Γ, Δ の内部で正則で, $z = i$ は f の 1 位の極である. Γ, Δ はその定め方からともに負の向きが定まる (向きが等しい) から,

$$\int_\Gamma f(z) dz = \int_\Delta f(z) dz$$

が従う. 以上より,

$$\begin{aligned} \lim_{R \rightarrow \infty} \int_L f(z) dz &= \lim_{R \rightarrow \infty} \operatorname{Re} \left(\int_{L_R} f(z) dz \right) = \lim_{R \rightarrow \infty} \operatorname{Re} \left\{ \left(\int_\Gamma - \int_{C_R} - \int_L - \int_{C_{-R}} \right) f(z) dz \right\} \\ &= \lim_{R \rightarrow \infty} \operatorname{Re} \left\{ \left(\int_\Gamma - \left(\int_\Delta - \int_C \right) \right) f(z) dz \right\} = \lim_{R \rightarrow \infty} \operatorname{Re} \left(\int_\Gamma f(z) dz - \int_\Delta f(z) dz \right) = 0 \end{aligned}$$

を得る. ■

群 $G = (\mathbb{Z}/4\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/6\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/9\mathbb{Z})$ の指数 3 の部分群の個数を求めよ。

[解答]

$\mathbb{Z}_n := \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ とする。

G の指数 3 の部分群を H とする。 G は可換なので $H \triangleleft G$ であるから、 G/H は剰余群である。 $|G/H| = 3$ は素数なので、 $G/H \cong \mathbb{Z}_3$ であるから、 $g \in G$ ならば $3g + H = 3(g+H) = H$ なので $3g \in H$ となる。 よって、 $3G := \{3g \in G \mid g \in G\} \subset H$ を得る。

$(G/3G)/(H/3G) \cong G/H$ なので、 G の指数 3 の部分群と、 $G/3G$ の指数 3 の部分群は全単射に対応する。 自然な準同型 $\phi : G \rightarrow \{0\} \times \mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3$ は

$$\text{Im}\phi = \{0\} \times \mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3,$$

$$\text{Ker}\phi = \mathbb{Z}_4 \times \{0, 3\} \times \{0, 3, 6\} = 3G$$

をみたすから、 準同型定理により $G/3G \cong \mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3$ である。 よって、 $\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3$ の指数 3 の部分群の個数を求めればよい。

$\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3$ の指数 3 の部分群の位数は $|\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3|/3 = 3$ である。 また、 素因数分解 $|\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3| = 3^2$ により、 $\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3$ の任意の真部分群の位数は 3 であるから、 $\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3$ の真部分群の数を求めれば良い。

任意の $x \in \mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3 \setminus \{(0, 0)\}$ に対して $2x \neq (0, 0), 3x = (0, 0)$ であるから、 x により生成される群 $\langle x \rangle$ は位数 3 の部分群となる。 3 は素数なので $\langle x \rangle$ は巡回群である。 $\langle x \rangle = \{(0, 0), x, 2x\}$ なので、 $\langle x \rangle = \langle y \rangle$ となる $y \in \mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3 \setminus \{(0, 0)\}$ は 2 個存在する。 したがって、 求める個数は

$$\frac{|\mathbb{Z}_3 \times \mathbb{Z}_3 \setminus \{(0, 0)\}|}{2} = \frac{3^2 - 1}{2} = 4$$

である。 ■

$f: S^2 \rightarrow S^1$ を C^∞ 級写像とする. ただし, S_n は n 次元球面

$$\left\{ (x_0, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^{n+1} \mid \sum_{i=0}^n x_i^2 = 1 \right\}$$

を表す. このとき, S^2 上の少なくとも 2 点において f の微分は零写像になることを示せ.

[解答]

被覆空間 $p: \mathbb{R} \rightarrow S^1; x \mapsto (\cos 2\pi x, \sin 2\pi x)$ は \mathbb{R} が単連結だから普遍被覆である. また, S^2 は単連結だから f の持ち上げ $\tilde{f}: S^2 \rightarrow \mathbb{R}$ が存在する. $p: \mathbb{R} \rightarrow S^1$ は被覆空間で C^∞ 級, f はもとより C^∞ 級だから \tilde{f} は可微分写像である.

\tilde{f} は連続で S^2 はコンパクトだから, $\tilde{f}(S^2)$ は最大値 M , 最小値 m をもつ. $a \in \tilde{f}^{-1}(M), b \in \tilde{f}^{-1}(m)$ をとる. $a \in S^2$ の座標近傍 $(U, \phi), (u, v) \in U$ をとり, $(u_0, v_0) := \phi(a) \in \phi(U) \subset \mathbb{R}$ とすると, $M = (\tilde{f} \circ \phi^{-1})(u_0, v_0)$ が最大値だから, $\tilde{f} \circ \phi^{-1}: U \rightarrow \mathbb{R}$ の微分可能性より,

$$\frac{\partial(\tilde{f} \circ \phi^{-1})}{\partial u}(u_0, v_0) = \frac{\partial(\tilde{f} \circ \phi^{-1})}{\partial v}(u_0, v_0) = 0$$

である. よって, \tilde{f} の $a \in S^2$ でのヤコビ行列は

$$(J\tilde{f})_a = \left[\frac{\partial \tilde{f}}{\partial u}(a), \frac{\partial \tilde{f}}{\partial v}(a) \right] = \left[\frac{\partial(\tilde{f} \circ \phi^{-1})}{\partial u}(u_0, v_0), \frac{\partial(\tilde{f} \circ \phi^{-1})}{\partial v}(u_0, v_0) \right] = [0, 0]$$

である. $b \in S^2$ でも同様にして, $(J\tilde{f})_b = [0, 0]$ である.

いま, $f = p \circ \tilde{f}$ であるから, f の $a, b \in S^2$ でのヤコビ行列は

$$(Jf)_a = (Jp)_{\tilde{f}(a)}(J\tilde{f})_a = 0, (Jf)_b = (Jp)_{\tilde{f}(b)}(J\tilde{f})_b = 0$$

となって, S^2 上の少なくとも 2 点において f の微分は零写像になる. ■